

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	加藤 廣隆（京都府）
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	甲第 1 0 号
学位授与の日付	平成 2 7 年 3 月 1 8 日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条第 2 項
学 位 論 文 題 目	カウンセリングにおける宗教性 —アニミズム的汎神論的宗教性とトポス—
論 文 審 査 委 員	主査 東山 弘子（佛教大学教授） 副査 牧 剛史（佛教大学准教授） 副査 多川 俊映（興福寺貫首） (帝塚山大学特別客員教授)

〔 1 〕 論文の概要

本研究は、説教と法話を通して実践される宗教家による相談活動と専門的理論と技法を通して実践される臨床心理士によるカウンセリングに共通する「宗教性」に着目し、カウンセリングに影響を与える要因としてのアニミズム的汎神論的宗教性とトポスについての論理的分析をおこない、それがカウンセリングの実践のなかでクライアントの人格変容にどのように影響するかを現象学的に示し、事例研究によって臨床心理学的に論考したものである。

内容は次のとおりである。

1 章 問題と目的

2 章 日本人の宗教性

3 章 カウンセリングにおけるトポスのもつ意味

4 章 事例研究

事例 1 母の喪の仕事を通して自分自身の人生を見つけた女性の事例

事例 2 セルフ（魂）の象徴との出会いをもった強迫行動の青年の事例

事例 3 トポスの働きによってセルフ（魂）の象徴との対話が持続し、人格変容を遂げた女性の事例

5 章 総合考察と今後の課題

1 章において、宗教者であって臨床心理士でもあるという論者の立場を明確にし、「誰

もが最終的には、生き生きした宗教が与えてきたものを自分が失ってしまったことに苦しんでおり、自らの宗教的態度を再び取り戻さなかった人は誰も実際には癒されていない。

（中略）今こそ心理療法家と宗教家がこの巨大な精神的課題を達成するために手を握り、力を合わせるべき時だ」というユングの言葉を引きながら、日本文化の中で実践される日本人のカウンセリングの癒しの道について分析することが目的として提起された。

2章において、日本人の宗教性とカウンセリングの関わりについて膨大な文献を読み解くことによって論じている。日本人の「物語」は汎神論的宗教性の枠組みのなかで創造されるという研究者の文献が紹介され、論者の自験例をもとに分析、考察された。

3章において、トポスの意味が歴史的、文化的、臨床心理学的、宗教的に分析された。論者がカウンセリングを実践している寺、仏、菩薩がもつトポスの意味と、カウンセリングに働くトポスの意味が論じられている。すなわち、寺の境内が魂の働きを守る「器」として機能し、寺の持つ魂とクライアントの魂が感応することによって、癒しと変容とおさまりの装置として働くとの結論が得られた。

4章において、論者がカウンセラーとしてカウンセリングを実施した3つの成功事例について臨床心理学的に考察された。

5章において、心理療法家のアイデンティティと宗教家のアイデンティティが相補的に働くことが重要であるとの結論を得たが、事例研究の中で具体化されるには至っていないきらいがあり、その探究が今後の課題として提起された。

〔2〕 審査結果の要旨

（1） 宗教的体験について

現代人は、科学的思考のために宗教の基盤が日常的ではなくなっている。特に仏教は本来持っていた深い宗教性から離れて、「葬式仏教」や正月、節分、お彼岸、お盆、婚約時、などの紋目だけになっている。このように日常の宗教性から遠ざかることは、現代日本人の不安の一端が「アニミズム的汎神論的宗教性を基盤」の脆弱化に関係していると思われる。僧侶の仕事も、形式的になっている。宗教が人間の悩みの解決に力をなくしてきたことから、臨床心理士が専門的にカウンセリングを行うようになってきた。しかし、臨床心理士にとっても、難しいクライアントの心理療法をしていると「生と死」の問題がクローズアップされ、宗教的なレベルでの理解が必要とされる場合が多い。臨床心理士は宗教について考えざるをえない。フロイド、ユング、河合隼雄、と心理療法の理論を作ってきた臨床心理家はすべて「心理療法と宗教」についての著作があることから、魂の根底に存在する人間の心理が考究されている。

そのような先人の膨大な著作を丁寧に読み込み、論者の中心的論点である「アニミズム的汎神論的宗教性」と「トポス」の視点から宗教体験について論究したことはオリジナリティに優れており、高く評価できる。

（2） カウンセリングにおける宗教的教義や儀式の意義

論者は、事例の中でクライアントの要望に抵抗なく応えて儀式を行っている。このような行動は心理臨床家にはありえないことであり、むしろ禁じられているので、臨床心理学的意義をどう解釈するかが議論された。論者は宗教家として何の抵抗もなく儀式を実施し

ているが、カウンセリングの中でそれを行うのであれば心理療法的にどのような意味を持っているかを意識していることが必要であった。儀式を行っているときは僧侶であると切り離していたとしてもクライアントのほうはどう受け止めているのか、クライアントにとってどのような意味を持っているのかなど、無意識ではいられない。その後の見立てはなされていたかどうかも重要なことである。結果的には、提起された事例については、カウンセラーとの心理的空間のなかでクライアントの「わたしの儀式」として共感的に実感されることによってクライアントの内的世界の大転換が起こったという点で、心理療法的意義を認めることができるという結論に達した。しかし、こういう行動化は事例によってはへたをすると本人や家族の命が失われたりする大きな危険性があることを意識化していることが求められ、かつ限界についての認識がされていることが重要である。そのことがあれば、クライアントの宗教的体験のもつ心的意味づけが明確になったと思われる。

（３）宗教的アイデンティティと心理臨床的アイデンティティの相補的機能性

宗教には教義経典があり、理想の在り方が説かれている。宗教家のアイデンティティは経典を原点としてあるべき姿を説くことに重心が置かれている。心理臨床家は教義経典をもたず、今置かれているクライアントの現実から出発し、クライアントの心的内界の長い旅に伴走する。この二つの立場は分離されるのではなく、融合的相補的に働くことを見失うことなくものごとの全体性を見ていくことによって、より深く「生きる」というテーマに近づくことが可能になるのであろう。

（４）宗教的カウンセリングの適用性

本論文に提示された３事例はカウンセリングが成功したが、すべての相談事例に適用されるというよりも、どのような事例であれば有効であるかを論究しておくことが求められる。

３事例ともに、クライアントは論者の寺を訪れて相談を申込んでカウンセリングが始まっている。クリニックなどではインテーク面接でアセスメントを行い、見立てに基づいて、治療契約を交わす。もちろん、どのカウンセラーも万能ではなく、アセスメントの結果によっては得意な領域と不得意な領域もあれば、相談内容と技法が合わない場合もあり、相性や転移や投影現象もおこる。その他のルールもある。また、高齢者のカウンセリングでは人格変容というよりは、自分に人生を「収める」ということが重要視され、宗教を求める人々も多いので、論者のカウンセリングが有効であると思われる。

どのようなクライアント、どのような相談内容にたいして有効であるか、についての臨床心理学的アセスメントにもとづく分析考察が必要とされる場所である。

このように、本論文にはまだ不十分な点が残されてはいるが、「アニミズム的汎神論的宗教性」と「トポス」に基づくカウンセリングにおける宗教性について独創的な論究をし、独自の技法でカウンセリングに成功し、技法的な新しい知見を得ることができたことは学問的に高く評価できる。

以上の点から、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断する。